

ベトナム

# サッカーと「民と官」

今井 淳一

## ●ベトナムで人気のサッカー、でも国内リーグは……

ベトナムではサッカーが人気のスポーツ。ハノイの街中にもサッカー場、フットサルコートがあちこちにあり、「ボンダー（サッカー）カフェ」と呼ばれるカフェでは地元の人々が試合を観ながら大いに盛り上がる。特に欧州リーグはイングランド・プレミアリーグをはじめ、独、伊、仏、スペイン、最近では米メジャーリーグサッカーも放映され、その充実ぶりは日本にいるよりも世界のサッカーが断然身近に感じられるほどだ。

ただ肝心の国内リーグといえ、ベトナム人が「サッカーは大好き、でもVリーグ（国内リーグ）は観ないよ」と答えるのが悲しい現状だ。国内リーグが盛り上がりがないなか、代表チームの成績も振るわず、さらにはサッカー賭博や八百

長問題も頻繁に発覚する始末。

そんなベトナムサッカーの世界だが、民間実業家の関与、干渉、そして貢献度が、その未来を大きく左右している。ベトナムサッカーにおける「民と官」、そして変化の兆しを紹介したい。

## ●「民」に振り回されるベトナムサッカー

ベトナムでもかつては国防省などの官のチームが人気と実力を博していた時期があるが、今ではリーグの各クラブとも大企業のスポンサー支援を支えに経営している。その意味で民間経済がベトナムサッカーを支えている面は否定できないが、長期的視点のないサッカーへの投資が、選手と、そして何よりサポーターを置き去りにしてしまっている面は否めない。例えばホーチミン市のチームであった *Kuan Thanh Sai Gon*。二

〇一三年シーズン最終盤、ベスト

メンバー規定に反し経験の浅い選手ばかりを出場させ、試合でも無気力なプレーを行ったとしてVFF（ベトナムサッカー連盟）から勝ち点四点没収という処罰を受けた。これに不服の *Xuan Thanh* グループのオーナーは、何と最終戦を待たずにVリーグを脱退してしまったのだ。ベトナム最大の経済都市、ホーチミン市のチームがあっけなく消滅してしまった。

さらに首都ハノイのクラブであるハノイT&Tは、多様な業種に事業を展開する投資会社のT&Tグループがメインスポンサーとなっている。同社会長兼CEOのドゥ・クアン・ヒエン氏は大のサッカー好きで知られているが、実は同氏はサイゴンハノイバンク（SHB）の会長でもあり、しかもそのSHBがダナン市にある「SHBダナン」を所有している

ことから事情は複雑になる。この「二人のオーナー、二つのクラブ」問題は、日本であればありえない話だが、本人は二〇一二年のインタビューで「二つの異なる会社それぞれを経営している、問題ない」と意に介さずの姿勢だ。

Vリーグの各クラブは地域のクラブというより、企業名のクラブという色彩が強く、企業名を冠しないクラブは少数派だ。そのためスポンサー、オーナーの意向や、クラブの経営不振などでチームがあっさり解散してしまう。その度に地元サポーターは落胆し、選手は路頭に迷う。一昨年日本のJリーグ、コンサドーレ札幌に移籍して「東南アジア初のJリーガー」と注目を集めた「ベトナムの英雄」レ・コン・ビンも被害者の一人。二〇一二年に所属していたハノイFCが、メインスポンサーである銀行の経営者逮捕（これ自体もベトナム政争に巻き込まれたという見方もあるが……）により解散、所属先を失う憂き目があったのだ。もちろん彼ほどの実力と知名度があれば拾ってくれるチームもあるが、大抵の選手はそうはいかない。選手もサポーターも振り回されるばかりだ。

## ●VFFの「官」体質

これら民間経営者がやりたい放題になってしまふ背景には、リーグを律するはずのVFFに対する不信感も原因として挙げられる。

VFFの官体質は代表チケット販売に非常によく現れている。二〇一四年一月、フル代表が久々に勝ち進んでのスズキカップ（東南アジアのワールドカップの大会）。ハノイで開催される試合は「公式文書」提出団体経由での販売が総チケット数の四〇%。つまり政府機関や各種公的団体からのレターで半分近くのチケットが配られてしまっていた。これでは、久々の躍進を地元で観たいと思っていた一般市民は軽視されているといわざるをえない。昨年九月、これまた躍進著しい一九歳以下代表（U-19、後述）出場のハノイでの大会では、チケットを買えないサポーターが怒りのあまり暴徒化し、VFFの壁や門が破壊される騒ぎとなった。これなども、単にチケットが買えないというだけでなく、「VFFに不当に取り扱われている」と感じる一般サポーターの怒りが根底にあるだろう。飛び抜けた民間資本が大きく影響力を持つと同時に、こうした官

優位の発想も根強い、ベトナムサッカー界の現状は現在のベトナム社会を象徴しているようだ。

## ●代表チームを作ってしまった た事業家

そういった官と民の対立関係のなか、代表チームを作ってしまった（!?）事業家もいる。ホアンアザライグループ（以下HAGLと略）の会長ドアン・グエン・ドユック氏だ。彼はベトナム有数の資産家。昨年末段階の株式長者番付ではベトナムで第二位の約三億五〇〇万ドルの株式資産を誇る。ベトナム国内サッカーに対して強い関心と情熱を持つドユック氏は、ザライ省ブレイク市に二〇〇七年にサッカーアカデミーを設立、イングラント名門アーセナルと提携して選手を育成している。ベトナム中から将来性のある子どもを集め、寄宿制学校も完備、すべての時間をサッカーに費やすことができる環境を作った。学費、生活費などのほとんどが補助されるということの数多くの応募者があるなか、ベトナム人コーチを選手選抜に全く干渉させず、外国人コーチなどの意見で選抜するという、ベトナムでありがちな金・コ

不合格を避ける厳格ぶりだ。

その成果は現れ始めた。HAGLアカデミーの一期生などを中心とした一九歳以下代表、U-19が東南アジアで、そしてアジアの舞台でも勝ち始めたのだ。技術のしつかりとした彼らのサッカーは、ベトナム国内サッカーファンも魅了し、フル代表を凌ぐ人気者となった。ドユック氏のビジョンが国の代表チームを作ってしまったといっても過言ではない。

## ●変化の兆しとこれからのベトナムサッカー

このHAGLが育てたU-19世代がいよいよVリーグ各クラブ（といっても、主には同じくVリーグのHAGLクラブ）に加入したことから、Vリーグをみる顧客にも変化が現れ始めた。HAGLはVリーグで初めてシーズンチケットを販売、好調な売れ行きをみせた。シーズンチケット購入者にはチームユニフォームがついてくるなど、経営としても単なるスポンサーからの資本注入だけではない、観戦してくれるサポーターからの収入を生む体制を築きつつある。リーグの冠スポンサーにもトヨタが名乗りを上げ、リーグの注

目度が高まったことを印象づける。

また、JFA（日本サッカー協会）とVFFの提携に基づき、二〇一四年五月にベトナム代表監督にJリーグで監督を務めた三浦俊也氏が就任して以降、ベトナム代表チームも好調なことがサポーターの期待をさらに膨らませる。フル代表はスズキカップで決勝トーナメント進出、前記U-19のホープも参加して編成された五輪代表（U-23）も、二〇一五年三月の五輪予選を兼ねたAFC、U-23選手権一次予選で強豪日本と同組ながらも二位を確保し、カタールで行われる本選出場（リオ五輪最終予選）を決めた。

企業スポンサー優位という現状には変わりがないが、民間経営者の先見の明から生まれた若い力と、日本との交流がきっかけとなってできた新風で、ベトナムサッカー人気に追い風が来ていることは確かだ。海外サッカーばかりでなく、国内サッカーにも注目しようともう一度目を向けてくれているサポーターに、これからは国内リーグの各チームがどれだけ応えられるだろうか。

（いまい じゅんいち/JICA 専門家）